

12/12 原子力討論会イン広島 2015 詳細報告書

報告者 針山日出夫



(対話会終了後の集合写真)

【対話会概要】

今年で8回目となる原子力討論会イン広島が平成27年12月12日(土)に瀬戸内海の大崎上島に位置する広島商船高専で開催された。今回は同学の「地(知)の拠点学校行事(Center Of Community: COC)」の一環として“地域でエネルギーについて考えよう”を行事エンブレムとし、東電福島事故以降のエネルギー問題と原子力をとりまく諸問題を理解することを目的に開催された。参加者は地域の方が25名、学生が29名、教職員が9名、シニアが8名の総勢71名。基調講演は斎藤伸三氏が講師を務め、エネルギー/原子力問題全般について網羅的かつ最新のデータを織り込んだ分かり易いものであった。討論会は広島商船高専教職員の尽力で入念に準備され、参加者全員が4つのグループに分かれて、夫々のびのびと発言し昼食を挟んで熱心な討論が展開した。グループ討論のあと、各グループ代表の学生から討論結果の発表があり参加者全員で成果を共有し認識を深め合った。休日返上で参加下さったすべての方々に感謝します。次回は例年通り来年の12月に開催することになった。

1. 対話会全体プログラム

- 日時 平成27年12月12日(土)9時~15時半
場所 広島商船高専本館 多目的室(大崎上島)
参加者 (地域の方)25名、(学生)29名(教職員)村上校長、馬場教授
岡山教授 他6名 (シニア)斎藤伸三、三谷信次、西郷正雄
寺澤倫孝、中村威、松永健一、碓本岩男、針山日出夫
- 9:00~9:30 開催挨拶(馬場教授)、シニア・オブザーバーと教職員の紹介
原子力についての入門概説と机上実演(岸 助教)
- 9:30~10:30 基調講演「我が国のエネルギー問題と原子力」(斎藤伸三氏)
エネルギー供給の現状、再エネの利用状況、世界のエネルギー
利用の推移と予測、CO₂排出と温暖化、今後のエネルギー供給
構造と原子力について分かり易い説明があった。
- 10:30~14:00 グループ討議(以下の4グループで討論、昼食含む)
グループ① 地域の活性化とエネルギー
グループ② エネルギーの供給(経済性、安定性、環境保全)
グループ③ 福島事故の実態と放射線の影響
グループ④ 原子力発電の再稼働(必要性、安全性)
- 14:00~15:20 学生代表による発表と質疑応答
15:20~15:30 アンケート、講評(中村威氏)、閉会挨拶(村上校長)

2. 開会、紹介(シニア、教職員)、予備的説明(岸 助教)

馬場教授より開催趣旨の説明があり、次いでシニアと教職員の簡単な紹介があった。その後、岸助教より、小型発電機を使っての発電の仕組みやガイガーカウンタを使って日常的に身近にある放射性物質について危険がないことの説明があった。

3. 基調講演(斎藤伸三)

SNW 斎藤伸三氏より「エネルギー問題と原子力の役割について」現状と課題を平易に且つ総括的な基調講演があった。具体的な説明の前に、参加者の意識づけを目的にしたエネルギーの現状や放射線に係る簡単な質問が出された。講演の具体的項目と要点は以下の通り。

ー我が国のエネルギー供給の現状

(エネルギー自給率は6%、東電福島事故後は火力発電比率が92%)

ー再生可能エネルギーの利用状況

(太陽光・風力発電は利用率低い、発電単価は安くない、ドイツの失敗例)

－世界のエネルギー利用の推移と予測

(世界人口とエネルギー消費、化石燃料国別生産量、主要国のエネルギー自給率、世界は今後も原発に依存の見通し)

－炭酸ガス排出と地球温暖化

(温暖化の実態、CO₂排出量予測、削減目標)

－今後のエネルギー供給構造と原子力

(原発の短所、長所、原発の運転状況、放射性廃棄物の処分方法、原発の安全強化策、各エネルギー供給オプションの総合比較評価、我が国のエネルギー供給構造の在り方、原子力という選択肢は外せない)

4. グループ対話の概要

以下に各グループでの対話結果の概要を示します。

＜グループ① 対話の概要＞

報告者：碓本岩男

1. 対話テーマ

「いい木の活性化とエネルギー」を共通テーマとした上で、グループ1の人達に、質問、意見、気になることなどを自由に書いてもらい、その内容を整理して「地域活性化」、「バイオエネルギー」、「その他」に分類し、馬場先生の司会、進行のもと、日頃皆が感じていることを自由に話してもらい、シニアと意見交換を行った。

2. 参加者：合計 16名

(学生) 7名(中西、徳満、安森、山元、北川、高畑、道本)

(地域の方) 7名

(学校関係者) 馬場先生

(シニア) 斎藤、碓本

3. 対話の流れと特記事項

馬場先生がファシリテーター役となって議事を進行してき、最初に全員が簡単な自己紹介を行った。自己紹介後、日頃感じている疑問、意見、質問などを自由に書き込んで頂き、これを整理集約してから、書いた内容を先生に取り上げてもらい、皆が意見を言う形で対話を進めた。

「地域活性化」は日本の地方共通の課題であり、解決策を導くのが難しいテーマであったが、地域活性化とは？ということから議論を進め、①人口が増えること、②若者が増えること、③仕事が増えること、④経済が豊かになること、をベースに皆の意見を出し合った。

主な意見は以下の通りであり、まとめとしては、島の魅力のアピールと、雇用確保のためのバイオエネルギー利用、となった。

- ・大崎上島町の魅力を知ってもらうことが重要で、このために皆が、色々な交流を通じて、大崎上島町のPRを積極的に発信していく必要がある。
- ・島外から移住してくる人が地元住民と親しく接知られるように交流の場を作ることが大事。少し前まで広島商船高専で運動会(体育祭)を行っていて、お祭り会場みたいな役割をしていたが、運動会は休止している。
- ・観光で一時的に来てもらうことも重要ではあるが、永住してもらうためにはやはり仕事の確保が重要。
- ・現在、中国電力のIGCC(石炭ガス化複合発電)実験プラントを島に建設中であり、一時的には多く人が来ているが、建設が終了すれば運転員だけになるので人は減少する。
- ・島の雇用の確保として再エネ利用があるが、風力は島に向かず、太陽光は雇用に繋がらない。
- ・バイオは可能性があるが、継続的に燃料を供給することと、木材、竹材を燃料とする場合には伐採、輸送手段の確保が重要。
- ・バイオ燃料として、島の主要産業のみかんが考えられ、みかんの廃棄物ならば継続的に燃料供給できるのではないか。

＜グループ② 対話の概要＞

報告者：西郷正雄

1. 対話テーマ：エネルギーの供給

2. 参加者：合計17名

(学生)：7名(商船5年2、専攻科2、電子3年1、流通5年2)

(教職員)：流通情報工学科 岡村修司教授

(地域の方)：4名+1名(呉市：EPOちゅうごく 青山範子地域実行委員)

(シニア)：西郷正雄、松永健一

3. 対話の内容

岡村先生のファシリテーター役のもとに、最初に全員の自己紹介を行い、その後、各自に疑問点、質問点を引き出してもらい、白板に、テーマを次の4つにグループ分けしてまとめた。その後、質問者よりその内容を伺い、それに対して、シニアが応える形で進められた。ただ、その際の意見交換において、学生からの発言が、少なく、先生と地域住民とシニアからの意見が多くなった。そのために、途中軌道修正を行い、学生から質問を引き出すために各自順番に質問を要求した。その結果、全体が万遍なく会話ができるようになった。

4 項目の議論：(1) 安定性、(2) 経済性、(3) 環境保全、(4) 安全性

主な議論としては、「なぜ、再稼働するのか」、「原発が停止してから、年間3.7兆円の費用流出は多いのか少ないのか」、「ウラン燃料が、準国産品である理由は」、「廃炉スケジュールは」、「使用済み燃料の再処理施設への輸送方法は」、「もんじゅと常陽の違いは」、「原子力発電所での事故は大きく取り上げられるが、他の発電所では事故はどの程度起きているのか」、「幸せの物差しを経済性だけで計るのはおかしいと思うが」等々について行った。

テーマを分類はしたが、説明の中身が、他のテーマにも跨ることがあるために、合わせた形での説明をしたりした。特に、再稼働をなぜ行うのかについては、3E+Sについて、まず前提となるSに関して、新規規制基準を新たに決めており、その内容は、福島事故の際に発生した地震・津波規模には十分に対応でき、さらに、竜巻、森林火災なども考慮した以前の基準を大幅に厳しくしたものになっていること、従い合格すれば、安全性は、大幅に向上しているとみなせるので、再稼働しても大丈夫と考えられること、また、再稼働により、経済性、温暖化対策などへの対策に通じることを説明した。

もんじゅと常陽の違いでは、原発を商用化にもっていくまでには、研究炉(常陽)、原型炉(もんじゅ)、実証炉を経て初めて商業炉にもっていくことができることを説明した。

＜グループ③ 対話の概要＞

報告者：三谷信次

1. 対話テーマ：福島事故の実態と放射線の影響

2. 参加者：合計18名

(学生)：6名(電子5年1名、電子4年2名、電子3年1名、商船5年1名、専攻科1名)

(地元の方)：上原町民5名、竹原市民1名

(教職員)：岸先生、拓真先生、長谷川先生、尚道先生

(シニア)：寺澤倫孝、三谷信次

3. 対話の概要

3.1 対話のやり方

学生とシニアとの対話を始めるにあたって、標記課題についてどの程度参加者の皆さんがご存知か尋ねたところ、各人それぞれマチマチでメディアを通して断片的な知識しか持ち合わせていないということであった。対話をするにあたってある程度の知識を有しかつ共通の認識に立たないと互いに有効な対話が出来ず、シニアからの一方的な解説に終わってしまう恐れがあるため

と、参加者の多くからの要請で最初にシニアの方から、標記題目について最新の事情についてスライドによりプレゼンを実施することにした。

その後各人にポストイットに対話の課題、問題点等を記入してもらい、出てきた約二十件位の課題を岸先生に十件程度に整理して頂き、それについて順次質疑回答する方式で対話を実施した。

3.2 対話から確認できたこと

- 1) 福島原発サイト内の除染作業は、当初よりかなり進んできている。しかしその終了時期は必ずしも見通されているわけではない。
- 2) オフサイト(福島県内)の除染は、発電所周辺を除いてかなりの部分の放射線量が低下してきている。発電所周辺の 20mSv/年以下の帰還できる地域でも、風評被害などでまだ帰還できないでいる地域がある。
- 3) 福島県内には除染で集めた梱包袋がまだ多く放置してある。発電所周辺の仮処分埋立地に移送するための専用道路が今作られているところである。
- 4) 再稼働が始まっているが、想定外の福島事故の反省を踏まえて再稼働プラントは世界一厳しいといわれる新規制基準で審査されている。それでも想定外の事故の起こるリスクを0にすることは出来ないが、リスクは従来プラント以上に下がっている。
- 5) 国の情報公開が行政のホームページ等で行われているが、アクセスが難しかったり難解な用語だったり、国民の間に十分に伝わっているとはいえない。
- 6) 事故直後の福島県民からの不安に対する電話相談は、ただ「大丈夫」だけでは納得してもらえず、被災者からの話をとことんよく聞いてあげることにより効果があった。
- 7) 今後福島原発の解体、放射性物質の処理などには 50 年以上かかる見通しである。
- 8) 廃炉に係っている組織は、プラント建設に関係した大手メーカーだけではない。ゼネコン、水処理、化学プラント、バルブ、電気計装、空調、遠隔ロボット等の企業、大学、研究機関等々、日本国中の産業界、学会等が一丸となって廃炉に対応している。廃炉から得られる新技術が、新設炉や宇宙その他の産業にも応用できて、技術的に優位に立てるからである。今の学生達が将来会社に就職してもどこかで福島廃炉のプロジェクトと関係しているかも知れない。

＜グループ④ 対話の概要＞

報告者：中村威

1. 対話テーマ：原子力発電の再稼働（必要性、安全性）

2. 参加者：合計 17 名

（学生）6 名、（地域の方）6 名、（教職員）3 名、（シニア）針山、中村

3. 報告内容

“地（知）の拠点”活動の一環として、地域住民を含む対話会が行われるようになり今回で 8 回目ということ、商船高専生のみでなく地域の住民参加型という他には見られない形での対話会が行われているのが特徴である。

馬場教授による開会挨拶、SNW 出席者の自己紹介、岸先生による身近な放射線などの説明の後、斎藤講師による基調講演“我が国のエネルギー問題と原子力”がなされ、その後各グループの対話会が行われた。

対話は岡山先生のご指導により、基調講演や原発再稼働についての疑問、質問を参加者に求め、それらを整理し対話を進めるという形で行われた。

地域の方たちからは、日頃から原子力、放射線、環境等に問題意識を持たれているのか質問が相次ぎ、高速炉もんじゅについては将来の我が国のエネルギー確保のためには撤退することなく推進が必要である、また、再生可能エネルギーや蓄電技術の開発など将来のエネルギーについての発言もなされるなど活発な発言がなされた。

一方福島事故の現状について、その汚染水対策や廃棄物処理の問題、人体への影響などなど、現実問題への関心も示された。

他方学生側はというと、日頃、学業中心の生活を送っているためか、エネルギー問題や原子力再稼働など社会問題にはあまり関心がないのか少々消極的に見えたが、これは地域の方々の大きな声やその発言内容に押されていたのかもしれない。それでも後半には先生の指導により、発言も増えるようになり、自らの意見を明確に示す学生もあらわれ活発な意見交換会となった。

最後に対話のまとめとして、学生による発表がなされた。内容としては原子力発電にもいろいろ問題はあるものの必要ではないか、無資源国としてまた地球環境問題などの観点を無視するわけにはいかないのではというものであった。そこには対話会の成果としてその日に学んだことを何とか理解し、まとめようとした姿が見て取れた。

この一連の対話会が、今自らが何を考えなければならないのかという気付きの場を提供できたのではと感じた次第である。

以上

5. 参加者の感想

以下に参加シニアの感想を列記します。(順不同、敬称略)

<齋藤伸三>

広島商船高専との対話会は、今回が 8 回目とのことであるが、確か初回に参加し、懐かしく久しぶりであった。初回は、島に渡らず竹原市内で行ったので、フェリーで大崎上島に向かう途中、瀬戸内海の数々の島を見るのは興味津々であった。また、対話会には、地域の方々が大勢参加されると言うのも新鮮であった。

初めに基調講演「我が国のエネルギー問題と原子力」を依頼され、可能な限り新しいデータを収集し、我が国の脆弱なエネルギー資源の状況、再生可能エネルギー導入の実態、CO₂排出と地球温暖化、世界のエネルギー需要と供給の見通し等々を話し、我が国のこれからのエネルギー構成として原子力抜きは難しいことを押し付けることなく提示した。

グループ討議では、高専の地域貢献行動に沿った「地域の活性化とエネルギー」のグループに参加し、馬場先生のファシリテートの下に討議した。島の実情も全く分らなかったが、議論が進むにつれ、全国各地で抱える問題と同根であること、学生と地域住民とのコミュニケーションはほとんどないこと、住民の方も本課題について積極的に進めてきていないこと等が明らかになった。結論としては、適切な事業規模を考えた間伐材、かんきつ類の廃木、余剰の竹（これは発表の際に他のグループの住民の方から）等を用いたバイオマスによる発電事業が最も可能性があること、また、積極的に島の宣伝をし、観光の道を開くこと（発表した学生が素晴らしい夕日の写真を披露した一撮影会を催すのも一案）であった。住民の女性も地球温暖化防止活動推進員、IPCC 説明員あるいは環境保全アドバイザーの名刺を持ち積極的に発言され、有意義な楽しいひと時であった。学生は、懸命に知識を吸収し発表していたが、望むらくは自信を持って自らの言葉で話して欲しいところである。

<三谷信次>

広島商船高専は 4 回目くらいになるうか。学生達の対話能力は年を追って向上してきているように感じる。

今回は 3 班で「福島事故の実態と放射線の影響」ということで対話を行うに当たってはこれまで関西や九州で経験したことであるが、福島から遠く離れるほど情報がその地域によく浸透していないことによる弊害のあることが痛感された。そのことが風評被害等の一因になっているように感じた。学生達

も少ない 情報量ではあったがシニアとの対話に一生懸命に食らいついてくる意欲が感じられた。市民の方々は学生とは別に成熟した質問を投げかけてこられた。後で聞くと若いときに島の外で大学生生活を経験されておられる方も幾人かおられたようである。とてもレベルの高い市民、町民の方たちでありました。聞けば島全体を今後の過疎化から抜け出し活性化させるために、広島商船高専を中核に据えて大島全体を「知の拠点」とする活動がなされている由。対話を通して感じた市民の方々の知的レベルの高いことを考えると島全体が一体となって実現すること間違いなしと確信するにいたりました。

3班の対話に特に一方ならぬご協力を頂いた岸先生、長谷川先生、全体でご指導頂いた馬場先生をはじめ関係の先生方皆様にお礼申し上げます。またシニアと一緒に3班に加わって頂いた寺澤さんには、本題と再稼働との関連において詳しい資料を配布頂く等していただき厚く感謝致します。

<西郷正雄>

4年前に初めて参加し、今回は2回目となる。前回は、先生が学生と住民にしゃべらせることに重きを置いていたので、あまり話さなかったように思う。今回は、学生と住民より、私たちシニアへの質問事項を列挙してもらい、それらについて応える立場となり、話をする機会が多かった。世の中では原発再稼働反対が多いので、それに関わる「なぜ再稼働するのか」との素朴な質問による意見交換から始まった。私たちシニアの前なので、原発の再稼働については、反対との考えを前面に出すのではなく、安全性が大丈夫なのかとの質問であり、それへの説明を行った。理解してくれれば、有難いと願っているのであるが、反応からは、今一つくみ取れなかった。

また、経済性だけで幸せを判断するのは、好ましくないことが発言された。それについては、今後原発を停止したとすれば、コストの高騰により海外との競争に敗れ、経済性の悪化を生むであろうこと、それにより幸せに大きな影響を与えることは、確かであることを説明し、理解を求めた。

ここの学生は、5年間の寮生活なので、住民とのつながりが強いようである。島の行く末を気にされているのがよく分かった。島の活性化の話などがあり、住民には切実な問題であることを知り、村おこしについては、島の住民だけに任すのではなく、私たちも支援ができれば、手助けができればと思う次第です。

<寺澤倫孝>

今回は第3グループの対話に参加した。指定テーマは「福島事故の実態と放射線の影響」であった。参加者は学生6名、市民5名にSNWからの2名（三谷、寺澤）で、教員の岸先生がファシリテーターを務めた。

はじめに三谷氏より4年半前の事故発生以来の事故処理の経過と現状について詳細な説明があり、討論に入った。わが国がこれからのエネルギー源として原子力を受入れなければならないことを理解はしているものの、原発事故が福島において現実のものとなり、事故の対応に当たる当事者である電力会社や国に不手際があれば、事故処理が遅れていく。マスメディアの批判は風評被害を呼び、事態をさらに悪くする。この悪循環を除くためにもSNWの活動が果たす役割は大きい。参加する学生は日ごろ感じている疑問、質問を提出し、回答を求めるといふ、一方的なやり取りに終わることが通例ではないかと思われる。広島商船高専で毎年開催される対話会は一般市民の参加を受け入れている。一般に年配の市民の皆さんはマスメディアからの情報も多く、より広い視野をもって話題を提供することが期待され、議論を有意義なものにすることができる。学生にとっても視野を広げて、問題を考えなおすいい機会になっているのではないかと感じた。他のSNW対話でも考えたらいいのではないか。

<碓本岩男>

広島商船高専での原子力討論会への参加は、昨年に次いで2度目でした。広島商船高専での討論会は今回で8回目ということもあって、前回同様、学校側の準備、段取り、先生の討論などの進め方が素晴らしく、円滑に討論会が進められ、参加した皆様のご意見、ご質問をしっかりと聞くことができました。ただし、私が担当したのは「地域の活性化」という難しいテーマであり、この分野については専門外なので、学生さん、地域の皆様に有益な情報を伝えられた自信はありません。それでも私としては有意義な時間を過ごせ、また、楽しませてもらいました。

地域住民の参加者も多く、昼食を取りながら雑談をしましたが、バスの運行時間、運行ルートの問題があり、このため車がないと生活ができず、高齢者が運転しているので心配であること、山が荒れ放題であること、島に戻りたい若者がいても雇用の問題があり、帰れないこと、など地方の切実な悩みも聞くことができました。

前回も感じたことですが、風光明媚な島で暮らしているにも係らず、エネルギー問題、原発問題についての関心の高さ、質問、意見の的確さに、今回も驚ろかされました。前回、私が参加したテーマのグループにいた2年生2人が、3年生になった今回も参加してくれたことも嬉しいことでした。今回は違うグ

ループでしたので多くは話せませんでした。が、昼休みに楽しく雑談することができたのも良い思い出になりました。

<中村威>

“地（知）の拠点” 活動の一環として取り組む高専との対話も今回、8 回目を迎え、例年よりも多くの地域の方の参加もあり、全体として 70 名近くの参加者による対話が熱心になされた。斎藤講師による基調講演“我が国のエネルギー問題と原子力”ののち 4 つグループに分かれ、それぞれあらかじめ学校側から提示されていたテーマについて、対話がなされた。

我々の第 4 グループは、“原子力発電の再稼働（必要性、安全性）”というテーマのもとに岡山先生のリードにより、学生、地域住民の方々からの質問、疑問に答える形で、昼食をはさみながら対話を行い、その後学生たちによるまとめ、発表がなされた。

地域の方々はそれなりにいろいろのご意見を持っておられ、原子力に対する理解はエネルギー問題、地球環境問題の点から概ね肯定的なものであったが、一方学生たちはどうかということと現状の原子力ということについて情報、知識が十分でないのではという印象であった。また、地域の住民の方の発言に押されて戸惑い、これもやむをえないのではと感じた次第。しかし、対話の後半には先生から意見を求められると自らの意見を明確にするなども見受けられるようになったことはそれなりの進歩ではないかと考える。

日頃、大人の意見を聞くということに慣れていない学生たちにとってこのような場の設定は大切なことであるが、より一層の日常的交流が望ましいと感じたところである。

<松永健一>

私は 2012 年、2013 年に続き 3 回目の参加で「他の対話会との違い」と「この間の発展」を強く感じた。

「他の対話会との違い」は地域住民が多数参加する効果であろうか。今年度は特に約 60 名の参加者のうち半数近くが地域住民（年配者）であったためかもしれない。地域住民は、原子力の専門家ではないが、環境問題などの違う立場の活動を通じて社会的に高い意識を持っているためか、原子力が理解できず、多少同意できない面があっても、相手が何を言いたいかは分かるらしい。このため、こちらも極力原子力の専門用語ではなく、共通の用語や例え話で説明することに努めてみた。そのせいか地域住民の発言は活発であった。学生は少し大人しかったが。

また、「この間の発展」とは、広島商船高専が平成 25 年度に「地（知）の拠

点」を目指す活動を開始したことが影響しているのか、学生の発言に、従来以上に地域と密着した考え方や、自分の研究に地域エネルギー（波力発電など）を取り入れたりする姿勢が感じられた。4つのグループの討論テーマにも、従来どおりの「福島事故の実態と放射線の影響」や「原子力発電の再稼働」の他に、「地域の活性化とエネルギー」や「エネルギーの供給（経済性、安定性、環境保全）」（後者にも地域活性化の話題があった）という新しい話題が出始めており、バイオマス発電なども議論された。

そういう意識が根底にあるせいか、看板の名称が「原子力討論会」ではなく「エネルギー討論会」と変わっていたのが象徴的であった（集合写真参照）。シニアは、「原子力」を「エネルギー全体」や「分散志向」の視点から新たに捉え直す必要はないであろうか。

<針山日出夫>

教職員の方々が全面的に且つ入念に計画準備されたおかげで進行は円滑に進み、我々シニアも大船に乗った心境で、楽しく参加することが出来、一同深い達成感を味わうことが出来た。

学生や地域の方々の発言は大変参考になるもので、しっかり受け止めて今後の活動に生かしていきたいと思えます。とりわけ感心したのは、発言を促された学生が話し始めてその話しぶりが驚くほど理路整然と論点をしっかりカバーして原子力エネルギーの必要性を淀みなく説く話しぶりでした。子供らしさが残るあどけない容姿の学生の堂々たる話しぶり、成長ぶりに胸が熱くなりました。これも日頃の先生方の御指導の賜物と拝察し日頃のご尽力に敬意を表したい。また、休日を返上して参加いただいた地域の方々や献身的にサポートして下さった教職員の方々に篤く御礼申し上げます。

以上

6. 講評（中村威）

東電福島原発事故から4年10か月経過した本日の討論会では、日本ではこれ以上の原発が必要なのか？福島はどうするのか？地球環境問題はどのようにするのか？といった喫緊の話題について真摯な議論がされ、各対話グループを代表して学生さんから立派な発表がありました。

本日の参加者は、世代を超えて、立場を超えて色々と話し合うことが大切であることを実感したことと思えます。つついマスコミの情報に影響されて浮ついた考えに流されていないか？を自問した方も多いのではないのでしょうか。自分で考え、自分なりに情報を獲得してエネルギー問題や環境問題を自分

の問題、地域の問題として考えることの大切さを再認識してもらったのではないかと思います。

本日のような対話や討論を継続していくことが大切で、その討論を下敷きにして地域の活性化の状況や自分の住んでいる処の特徴などをよく知って外へ発信していくことも重要と思います。本日のような機会を通して自分の島、自分の広島県、そして自分たちの日本の将来を考え盛り上げて頂いたら素晴らしいことと思います。

以上

7. 閉会の挨拶（村上校長先生）

本日で8回目となる討論会は、小職が当校に着任してから始めたものです。広島は被爆地なので、原子力討論会は果たしてどうか～？との懸念はありましたが、真摯に対話/討論すれば理解が得られるのではないかと思います。エネルギーと原子力の話は国民感情や政策面で非常に難しい問題ではありますが、生活や産業に直結している重要なことなので、よく話し合うことが重要です。

社会は時代とともに変化し、エネルギーの自給自足に伴う問題も変化し、またいろんな副作用も顕在化します。しかし、このような便利な社会を維持発展させるために我々はどのようなことを検討し、何を選択すべきかを冷静に考えることは極めて大切です。この討論会がそのようなことにお役に立ち、地域の発展に少しでも貢献できれば有難いと念じております。

この討論会はこれからも継続していきますので皆様のご理解とご支援を宜しくお願いいたします。

以上